

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

序

著者	涌田 宏昭
雑誌名	経営論集
巻	30
ページ	ix-x
発行年	1988-03-14
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005751/

序

研究・教育は、果しなく拡りゆく空間を持つかのようであります。空間の広さを見極めて歩き出すと、何時の間にか空間は、深く広く、さらに新しい趣を湛えておるのです。私たちは、その中にあって、ともすれば位置や立場を見失ってしまったたり、己れを忘れがちで、歩みも時として乱れてしまうものです。

そこで、私たちは、果しなく思われる空間、茫漠とした空間の中で、自己を見つめ、己れの歩む方向を見定めようとしします。空間の中に目標を考え、いくつかの柱を立ててみて、歩き出すのです。しかし、時が立つと確たる考えで立てたはずの柱に自信がなくなってしまうものです。また、柱がだんだん数を増し、柱に向ってあちらこちらと歩き廻ると、しまいにはくたびれ果ててしまいます。

思えば、研究・教育は、華やかに見え、美しくさえ心に映じることもありますが、その実、霧中の山道を行く例えに似て、握みようもない広さの中で、厳しく身を処さねばならない厳粛さにひたることになるのです。

そのように思いつつ、神馬先生の研究・教育の数十年間に目を移してみますと、研究者としての神馬先生には、不動の目標があり、教育者としての歩みには、確かな柱が一つ一つ立てられていたように思えるのです。

たとえば、先生の研究の中心は、原価計算にあって、その面での研鑽は、今日までもなお続いております。さらに、会計学の研究では、特に管理会計を志向しつつ、時には病院会計等のような特殊な会計実践の畑にも分け入り、未知への挑戦に絶えざる努力を重ねてこられました。そして、常に原価計算の理論の深耕に身をおく傍ら、その実践的実用的会計学を重視してこられました。「鑄物企業原価計算」の著作は、その二つの面をよく表しております。時に、この作品は、東洋大学赴任後に完成し、昭和60年秋に刊行されたものですが、その著作に傾けた熱情は、若さと熱さを感じるほどに高いものと思います。

つぎに、教育の面における先生は、一見、温和にみえて、厳格、そして実践性に重点をおく教育者のように考えられます。本校では、主として大学院の教育を担当していたので、学園の中では、院生が多く取り囲み、学習や論議に花を咲かせているのをよく見かけました。休講の少いのも、先生の特色の一つに数えられるくらいの熱心さで、遠方の神戸市から毎週通う教授とは、とうてい思われませんでした。

また、昭和61年の1月末より、本学経営研究所の所長となり、退職される日まで、経営研究所の行政と研究活動を束ねる立場に立たされ、さぞかしご苦勞のことと思っておりましたが、あまりその事は口に出さず、老いてもその芯の強さには驚くばかりでした。私共、後輩にとっては、これらの生活を通じて、多々教わる場所がございました。

速きかな、5年の歳月の立ちますのは、昭和62年3月31日、神馬先生の定年を迎えたこの日は、私共経営学部の教員にとっては、真に淋しい思いの日でございました。

思うに、過ぎし日のあの親しみ深い数々の会話は、これからも私たちの心の資産となってゆくことでしょう。どうか先生には、定年の後も、ご健康に留意され、ますますご研究に研鑽を重ねられますようお祈り致します。そして、東洋大学経営学部に教鞭を取られたこの5年間を、先生の生涯の良き思い出の一つとしていただきますよう、お願い申し上げます。

昭和63年3月吉日

経営学部長 涌田宏昭